

東邦大学様と共同で開発し、2020年12月1日に発売した新製品 病原体検査用陰圧BOX「DANTECT for Pt(Pathogen testing)」(以下、「DANTECT for Pt」)は、既に全国の医療機関でご使用いただいております。

今回は、新型コロナウイルス(以下、COVID-19)やインフルエンザの抗原検査に「DANTECT for Pt」をご使用くださっている、田園調布中央病院の石田院長に医療現場の現状や導入に至った経緯、導入後のご感想などについてお話を伺いました。



病原体検査用陰圧 BOX・DANTECT for Pt



田園調布中央病院 石田 順朗 院長

ディスポーザブルで
小型・安価な病原体検査用陰圧BOX
「DANTECT for Pt」は、
コロナ禍においてまさしく時宜に適った製品である

院長写真：田園調布中央病院提供

地域医療を支える田園調布中央病院

田園調布中央病院は、一都四県に29の病院を擁する戸田中央医科グループの一角として、長らく地域医療を支えてきました。二次救急指定病院として24時間救急患者を受け入れるなど地域に密着した医療の提供に取り組まれています。

同院の石田院長は、他者のために思い他者の役に立ちたいという思いを原点に、単純に身体だけを診るのではなく、心や魂、愛や希望や幸福といった価値観を大切に、患者にどう関わることができるかを常に考えながら医療を提供されています。「人間同士は助け合うべき存在であり、医療の現場はそういう理想を高く掲げられる場です。」とお話くださったその言葉の通りに、このコロナ禍においても、地域医療を支えるため積極的に発熱患者を受け入れ、診療を続けておられます。

Interview

石田院長にお話を伺いました。

「DANTECT for Pt」導入前の貴院の状況と導入の経緯について教えてください

「DANTECT for Pt」導入前、当院では入院患者様全員にCOVID-19のスクリーニングを行うため、院内で抗原検査を実施する準備を進めておりました。

抗原検査については、臨床検査技師の安全を守るため、安全キャビネットの中で検査することが各種のガイドライン*で推奨されています。しかし、当院には据え置き型の安全キャビネットがありませんでした。導入も検討しましたが、設置スペース等の問題もあり、導入は難しいと感じておりました。

そこで、当院でCOVID-19抗原検査を安全に実施するにはどうしたらよいかについて、日頃よりご指導をいただいている東邦大学医療センター大森病院感染管理部の宮崎泰斗先生にご相談したところ、開発中の「DANTECT for Pt」をご紹介いただいた次第です。

※各種ガイドライン

「COVID-19抗原検査についての基本的な考え方」(日本臨床検査医学会 新型コロナウイルスに関するアドホック委員会 2020年5月26日)、「抗原検査の現状」(日本医師会COVID-19有識者会議 2020年6月11日)、「新型コロナウイルス感染症(COVID-19)病原体検査の指針 第1版」(国立感染症研究所他 2020年10月2日) なお、第2版以降は安全キャビネットがない場合についても言及あり

「DANTECT for Pt」を初めてご覧になった時のご感想をお聞かせください

まず、プロア以外はディスプレイ仕様となっているところが、非常に大胆でユニークであると思いました。汚染・汚損したらすぐさま新品と交換できるので、作業者の安全性を高めることができます。

また、筐体は段ボール製で安価です。安全キャビネットを持っていない病院やクリニックでも無理なく導入できる製品であると感じました。導入例が増えれば、検査可能な医療機関が増え、地域の検査能力の向上にも繋がります。

さらに、小型・軽量で簡単に移動でき、置き場所にも困りません。安全キャビネットのある大病院でも検査室に戻らず現場で簡易検査を行うことができるのではないのでしょうか。

このように、現在の医療現場に何が必要かを考え抜いて設計されているので、私たちにとって「真に役立つ製品」となっていると感じました。

導入のポイントは何でしたか

「DANTECT for Pt」のようなコンセプトの製品は他になく、医療現場の私達が今まさに必要としているデバイスそのものでした。

そのような製品の独自性も然ることながら、「真に人の役に立つ製品づくり」という高い志を持ち、プロフェッショナルとしての矜持を持って製品開発を進められる興研の企業姿勢に強い感銘を受けました。

その姿勢は、インフルエンザとの同時流行が懸念された第3波の到来を見越して、スピード感をもって東邦大学と共同開発を進め、12月1日に製品を発売し、人の役に立つ製品を本当に必要とされるタイミングで提供したところにも表れていると思います。

病院の感染防止対策の整備が早くなれば、それだけクラスターの発生が減り、患者さんにとっても、医療従事者にとっても、病院経営者にとっても、利益となります。実際に、当院では12月に「DANTECT for Pt」を導入し、検査体制を整えた上で、1月の感染の急拡大に対応することができました。現在も機動性に溢れた遊撃手として、COVID-19との戦いの頼もしい戦力となっています。

臨床検査科 渡辺政輝科長代理に 実際の使用感についてお話を伺いました。

ご使用になっていかがでしょうか

当院には6名の検査技師がおり、毎日のように「DANTECT for Pt」を使用したCOVID-19およびインフルエンザの抗原検査を行っています。1月以降、都内での感染の急拡大に伴い、当院での検査数も増加しております。「DANTECT for Pt」は非常にコンパクトで狭小スペースにも設置でき、中小規模の医療機関でも、無理なく検査の安全性を確保できるところが他にはない長所です。

実際に使用してみると、筐体が段ボール製で軽いため、作業中に動いてしまうという課題や、検査毎に使用済みの器具等の廃棄物を外に出す際に穴が小さく感じることはありますが、これはテーブルにテープで固定したり、ごみをこまめに処分し一回の取出し量を少なくするなどして対処しています。

一方で、本体には十分な耐久性があると感じます。検査結果が陰性の場合には、新品と交換せず、連続して使用していましたが、全く問題はありませんでした。

汚損しやすい底面の部分は専用の交換トレイを活用しながら、安全第一で作業しています。

総合的には、操作性に大きな問題はなく、スムーズに検査業務を実施できています。



臨床検査科 渡辺 政輝 科長代理

再び、石田院長にお話を伺います。

「DANTECT for Pt」の導入で
得られたメリットはございますか

当院には従来、安全キャビネットがなかったわけですが、「DANTECT for Pt」の導入により、ようやく新型コロナウイルスの抗原検査を、院内で安全に実施できるようになりました。医師や臨床検査技師が安全に検査できる体制を構築できたことは非常に大きなメリットです。

また、スタッフの安全確保以外にも、「DANTECT



製品使用風景

for Pt」の導入によって得られる利益は計り知れないものであると考えております。院内で検査できるようになることで、外注に出した場合に発生する医療のタイムラグがなくなるというのもその一つです。従来はPCR検査の結果がでるまで、1日以上待たなければなりませんでしたが。しかしCOVID-19抗原検査が実施可能となり、陽性者の一部をいち早く特定できるようになりました。院内で迅速に検査ができることは、人命に関わる医療の現場において、非常に重要であると考えています。

COVID-19を経て、今後どのような医療が求められるでしょうか

それぞれの医療機関が、自院で無理なく安全に実施可能な範囲でCOVID-19の診療を行うことにより、陽性症例の診療を行っている医療機関の負担を減らすことが急務です。

第1波のときには、COVID-19陽性症例に対応できる病院は少なく、多くの一般病院ではCOVID-19の可能性のある発熱症例の受け入れ態勢が確立していませんでした。結果として多数の発熱症例の受け入れ先が見つからない事態となりました。

その後、陽性症例用のベッドは増え、一般病院での発熱症例の診療体制も整備が進みました。しかしながら、今回の第3波によるCOVID-19の疾病負担は大きすぎて、しかも全国に広まっており、とても一部の医療機関だけが負うことのできる規模ではありません。COVID-19の患者数が増加して地域の陽性症例受け入れ体制が破綻すれば、自院で発生した陽性症例の受け皿がなくなり、自院の運営にも破綻が生じます。したがって、自院で可能な範囲のCOVID-19の診療体制を構築し、診療を分け持つことで、地域医療全体にかかるCOVID-19の疾病負担を減らしていくことは、自院にとって利益となる戦略です。

COVID-19への対応を行う上で、自院にとって「無理なく安全に」実施できるという部分が非常に大切です。無理な受け入れをして、院内でクラスターが発生した場合、患者様、職員、病院組織、地域の医療体制のいずれにとっても著しい損失となります。

そんな中、「DANTECT for Pt」は、院内で安全に検査を行う上で大きな力となります。使用する医師、臨床検査技師の安全を守ることに資する非常に有用なデバ

イスです。是非多くの病院、クリニックで使用していただきたいと思います。

今やCOVID-19に立ち向かうためには、世界中が力を合わせる必要があります。その第1歩として、私たちが、院内のそれぞれの持ち場で、互いに協力関係を築き、地域や社会におけるCOVID-19に対するリスクの一部を担う。その結果、この地域の医療提供体制が一步充実する。地域の医療体制の充実、やがては日本や世界のCOVID-19感染状況を良い方向に変えていく力になると思います。

最後に

取材にご協力くださいました田園調布中央病院様をはじめ、今なお新型コロナウイルス感染症の対応のため最前線でご尽力されている医療関係者の皆様に敬意を表しますとともに、心より感謝を申し上げます。

医工連携により生まれた同製品が、わずかでも医療現場の皆様の助けとなれば幸いです。当社は、今後も医療従事者の方々が少しでも安全かつ安心して業務を進めていただけますよう、感染対策総合企業として製品の開発及び供給を続けてまいります。



名称 : 医療法人社団 七仁会 田園調布中央病院
開設年月日 : 昭和28年10月13日
所在地 : 東京都大田区田園調布2-43-1
院長 : 石田 順朗
病床数 : 91床

P10-11 写真 : 田園調布中央病院提供